

# 野田正明の世界 ニューヨークから世界へ

2016年9月7日(水)－2016年12月18日(日) 会場:常設展示室

\*月曜休館 ただし9月19日(月・祝)、9月20日(火)、10月10日(月・祝)、10月11日(火)は開館  
 \*野田正明氏によるギャラリートーク 9月11日(日) 午後2時より  
 \*学芸員によるギャラリートーク 9月16日(金)、10月14日(金)、11月18日(金)、12月9日(金) 午後2時より

福山市新市町出身の現代美術家・野田正明(1949-)は、ニューヨークを拠点にアジア、ヨーロッパで活躍してきた現代美術家である。

野田は、版画から絵画、そして立体へと新しい領域に挑む姿勢を持ち続けて制作をしてきた。

本特集展示では、今年2月に作家より受贈した作品および、作家蔵の作品により、学生時代から最近までの絵画、版画、立体作品、あわせて約40点を紹介し、その造形的な変遷を時代背景と絡めながらご覧いただくものである。

## I 日本での活動

野田正明は、1949年に広島県芦品郡新市町大字戸手(現在の福山市新市町)に、備後がすり製造(後に縫製業)を営む父・實、母・澄子の長男として生まれた。

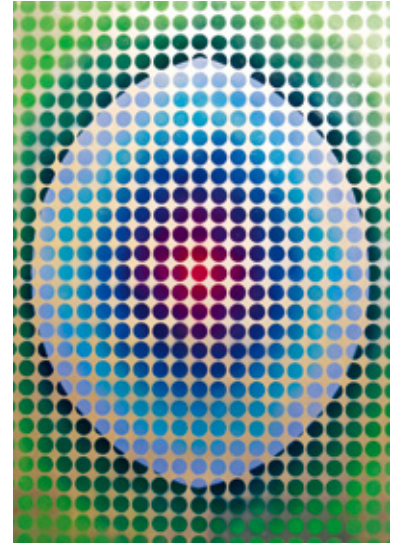
小学生の頃から絵画が得意であった野田は、中学校時代に美術部へ入部するものの、自由に描くことが出来ず、一時期興味を失う。1965年、戸手商業高等学校(現・広島県立戸手高等学校)に進学後、一転して柔道部に入部。野田は、運動部に所属することにより美術と距離を置き、美術の魅力やその見え方も変わっていったという。高校2年からは、美術大学受験を目指して美術部に入部し、広島の美術研究所にも通う。中学時代には退屈だった基礎的な鉛筆デッサンも、その重要性が理解できるようになり、絵を描くための通り道、表現するための訓練として積極的に行うようになっていた。

1968年、大阪芸術大学美術学科に入学した野田正明は、泉茂(1922-1995)に師事する。当時、関西を代表する現代美術作家の泉は、円や三角形など幾何学的な形態をテーマにした作品を制作していた。野田は、その影響で、《サークル-A》(no.1)にみられるように、師のエアブラシの技法に倣って、金網の上から、絵の具をブラシで擦り、銀色など微妙なグラデーションを表現している。技法だけでなく、表現の様式にも師の影響をみることができる。

1972年の卒業直前の1月、野田は大学での成果を問うため、大阪の信濃橋画廊で初めての個展を開いた。この会場で出会った画家、河野芳夫(1921-1999)と意気投合し、版画制作のアシスタントとして野田は河野の家に住み込み、制作を手伝うこととなる。《秋-1》(no.3)は、その頃のシルクスクリーンによる版画である。明度の高い色彩の対比、変化に富んだ有機的な形態表現がみられる。

当時、欧米から帰国したばかりの河野は、ニューヨークのスケール感に圧倒されていて、幾度となく野田にアメリカ行きを勧めたという。

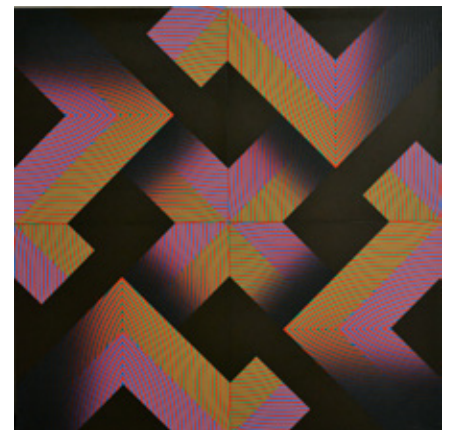
野田は、その3年後、27歳でニューヨークへ渡ることになるが、その間も精力的に制作し、次々と作品を発表した。1976年、「アート・ナウ '76」(兵庫県立近代美術館)に《エクスペッション-103》等を選抜出品したのをはじめ、「第26回モダンアート協会展」で《エクスペッション-110》(no.10)が、大阪市長賞を受賞するなど、関西画壇の若手として評価されつつあった。



1. 《サークル-A》 1971年



3. 《秋-1》 1972年



10. 《エクスペッション-110》 1976年



FUKUYAMA MUSEUM OF ART

ふくやま美術館

福山市西町二丁目4番3号 電話084-932-2345 JR福山駅北口から西へ400m



12. 《エクспRESSION 01-A》 1978年



13. 《次元 5-J》 1979年



14. 《次元 6-J》 1979年



15. 《永久運動》 1980年

## II 渡米後の展開

1977年9月、ニューヨークに渡った野田は、アート・スチューデントズ・リーグに通い始める。1875年創立の歴史ある美術学校で、一流の作家を多く輩出した名門校として知られる。一世紀遡る大正期には、国吉康雄(1889-1953)や石垣栄太郎(1893-1958)、清水登之(1887-1945)といった日本人画家たちもここで学んだ。2002年に野田は、「紙上の一世紀、アート・スチューデントズ・リーグ作家の版画1901-2001」展の出品作家として、同校の100年間のアーティストの1人にも選出されている。

野田は、エリザベス・カースティアズ奨学金を得て、1980年までの3年間、この学校に在籍した。ニューヨークでの最初の5年間、チャイナタウン地区に住居兼スタジオを構え、その後ソーホー地区に移り(現在に至る)制作に励んだ。

《エクспRESSION 01-A》(no.12)は、渡米して最初の作品である。フランク・ステラを想起させる、ハードエッジのシャープな輪郭線と極彩色がみられる。アメリカでの最初の連作となる「次元」シリーズは、抽象表現主義のマーク・ロスコのもつ色彩の透明感や深奥性に触発されたものである。《次元 5-J》(no.13)にみられるように、透明色の重層的な表現としている。シルクスクリーン用のインクではなく、油絵具に透明メディウムを混ぜたものをインクとして用いたのであった。この時期の野田は、日本でやってきた手法から早く脱却したい時期でもあった。

この時期、野田はニューヨークの画廊AAA(アソシエテッド・オブ・アメリカン・アーティスト)から作品が評価され、取り扱いの申し出を受けるほか、1979年、「第31回ボストン全米版画展」で《次元 6-J》(no.14)が買上げ賞となり、11軒の画廊からオファーを受けるなど、アーティストとしての生活も軌道に乗り始める。

1980年代、30歳頃の野田は、レオナルド・ダ・ヴィンチの素描集への関心を深め、《永久運動》(no.15)のような動きのある波状のフォルムのなかにコーン状の図形(レオナルドが描いたパラシュートの素描による)を取り入れた。野田は、レオナルドの精神性をその造形に織り込もうとしたのである。

躍動感のある有機的な波状の形は、ウィリアム・ターナーの一連の絵画作品に感銘を受けたことによる。野田は、ターナーの描いた大気の表現を参考に、それまでのシルクスクリーン版画による技法では例をみない、水彩画のような滲んだ効果を作り出した。野田は、複雑で微妙なボカシや透明な色彩表現から流れるような流体と吸いこまれるような異次元の空間世界を生み出した。野田は版画において独自の世界を創造した。

## III 絵画・立体の新展開

30代半ば頃の野田は、版画家として順調にキャリアを築く一方、《徴候》(no.21)にみられる木炭によるドローイングを描いている。自然界の複雑な大気を表現したいという思いが強く表されている。

この頃の野田は、版画の領域だけに安住することなく、画家としてアクリル、水彩、素描に取り組んでいたのがあった。野田は、空間的な絵画作品を描くうちに、「どんどん複雑になっていき、構想自体が絵に描けなくなった時(2次元ではその「裏」までは描けない)、立体を作る方が手っ取り早いんじゃないか?」<sup>(1)</sup>と考える。やがて絵を描くために立体制作に着手し始める。厚紙や粘土を素材にした小品の立体試作類は、平面世界のイメージを3次元に具現化する足掛かりとなった。

その立体制作が本格的に始動したのは、1982年のことである。ニューヨークの「国際空中アートの交響(空中彫刻)展」で、大型風船とパラシュート布による空中彫刻をつくった。

野田は、彫刻家のように造形物として最初から構造的に自立することを考えるのではなく、絵画表現の延長線上に自然と生まれてくる形態を生かすことを第一に考えて制作したのであった。見る角度によってさまざまに変化する立体に魅せられた野田は、その後も鉄やブロンズをはじめ、真鍮やコーラルテン鋼、ステンレスなどに加え、ガラス、御影石などあらゆる素材をもとに、立体作品を制作する。

# 野田正明の世界 ニューヨークから世界へ

●作家蔵 ○ふくやま美術館蔵 #は新収蔵品

No.	作家名	(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行(cm)	所蔵先
1	野田正明	(1949- )	サークル-A	1971	グワッシュ, 紙, パネル	102.8×72.6	○ #
2	野田正明		サークル-B	1971	グワッシュ, 紙, パネル	102.8×72.6	○ #
3	野田正明		秋-1	1972	シルクスクリーン, 紙	35.0×48.3	○ #
4	野田正明		正午	1973	シルクスクリーン, 紙	51.6×51.2	○ #
5	野田正明		エクスペッション-26	1974	シルクスクリーン, 紙	51.0×50.3	○ #
6	野田正明		エクスペッション-35-M-1	1975	シルクスクリーン, 紙	53.0×52.5	○ #
7	野田正明		回転-A	1975	シルクスクリーン, アクリル	55.0×55.0×9.0	○ #
8	野田正明		エクスペッション-57-A	1976	シルクスクリーン, 紙	60.4×54.6	○
9	野田正明		ブルー・エクスペッション-108	1975	シルクスクリーン, 紙, パネル	180.2×180.2	○ #
10	野田正明		エクスペッション-110	1976	シルクスクリーン, 紙, パネル	120.2×120.2	○ #
11	野田正明		エクスペッション-88-A	1977	シルクスクリーン, 紙	50.7×50.7	○ #
12	野田正明		エクスペッション-01-A	1978	シルクスクリーン, 紙	52.0×52.2	○ #
13	野田正明		次元 5-J	1979	シルクスクリーン, 紙	52.0×51.5	○ #
14	野田正明		次元 6-J	1979	シルクスクリーン, 紙	52.0×51.5	○ #
15	野田正明		永久運動	1980	シルクスクリーン, 紙	56.0×76.0	○
16	野田正明		作用	1982	シルクスクリーン, 紙	81.0×121.0	○
17	野田正明		回旋	1989	シルクスクリーン, 紙	57.0×76.0	○
18	野田正明		間隙	1994	シルクスクリーン, 紙	57.0×76.0	○
19	野田正明		範囲	2005	シルクスクリーン, 紙	30.1×39.2	○ #
20	野田正明		位相	1987	木炭, 紙	150.0×420.0	○
21	野田正明		徴候	1983	木炭, 紙	75.0×105.0	●
22	野田正明		反射の瞬間	1983	木炭, 紙	75.0×105.0	●
23	野田正明		予期	1998-2003	コラージュ, 手彩色, 紙	59.0×75.0	●
24	野田正明		静隠の残光	2001	ジェットプリント, 手彩色, 紙	70.0×59.0	●
25	野田正明		可能性	2005	ブロンズ	50.0×49.0×40.0	○
26	野田正明		反芻	2005	ブロンズ	52.0×44.0×30.0	●
27	野田正明		ラフカディオ・ハーンの開かれた精神のオデュッセイア	2009	ステンレス	90.0×61.0×30.0	●
28	野田正明		クワイダン	2010	ステンレス	70.0×41.0×24.0	●
29	野田正明		ヘルメスの精神	2010	ステンレス	50.0×25.0×9.0	●
30	野田正明		いまこそ未来	2012	ステンレス	89.0×50.0×27.0	○ #
31	野田正明		いまこそ未来	2016	鉛筆, 紙	150.0×120.0	●
32	野田正明		ヘルメスの精神	2016	鉛筆, 紙	150.0×120.0	●
33	野田正明		開花-B	2014	ジェットプリント, アクリル	53.5×60.0	●
34	野田正明		連鎖	2014	ジェットプリント, アクリル	52.5×70.5	●
35	野田正明		進化-10	2003	アクリル, カンヴァス	56.0×41.0	●
36	野田正明		進化-2	2014	アクリル, カンヴァス	56.0×40.5	●
37	野田正明		進化-3	2014	アクリル, カンヴァス	51.0×41.0	●
38	野田正明		進化	2000-2003	水彩, 紙	102.0×81.0	●
39	野田正明		進化 III	2000-2003	水彩, 紙	100.0×79.0	○
40	野田正明		進化 V	2007	水彩, 紙	74.0×60.0	●
41	野田正明		覚醒-V	2009	鉛筆, 紙	27.8×21.0	○ #
42	野田正明		覚醒-VI	2009	鉛筆, 紙	27.8×21.0	○ #

## 第2室 日本の近代美術

No.	作家名	(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行(cm)
43	高橋秀	(1930- )	ブルーボール#101	1971	油彩, カンヴァス	142.0×190.0
44	齋嘸	(1931- )	Violin on the chair	1967	油彩, 木	75.0×45.0×50.0
45	山口長男	(1902-1983)	壺形	1959	油彩, 合板	183.0×274.0
46	岸田劉生	(1891-1929)	橋	1909	油彩, カンヴァス	33.6×45.7
47	岸田劉生		静物(赤き林檎二個とビンと茶碗と湯呑)	1917	油彩, カンヴァス	33.7×45.8
48	岸田劉生		新富座幕合之写生	1923	油彩, カンヴァス	31.9×41.0
49	岸田劉生		晩春の草道	1918	油彩, カンヴァス	45.0×36.0
50	岸田劉生		麗子十六歳之像	1929	油彩, カンヴァス	47.2×24.8

No.	作家名	(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行(cm)
51	白瀧幾之助	(1873-1960)	帽子の婦人	1905-10頃	油彩, カンヴァス	72.3×53.0
52	南薫造	(1883-1950)	夏	1919	油彩, カンヴァス	116.7×91.0
53	須田国太郎	(1891-1961)	冬の漁村	1937	油彩, カンヴァス	48.5×59.7
54	梅原龍三郎	(1888-1986)	仙酔島の朝	1932頃	油彩, カンヴァス	65.5×80.5
55	安井曾太郎	(1888-1955)	手袋	1943-44	油彩, カンヴァス	89.3×72.8
56	小磯良平	(1903-1988)	婦人像	1969	油彩, カンヴァス	52.0×44.0
57	熊谷守一	(1880-1977)	女の顔	1931	油彩, 板	41.0×32.0
58	藤井松山	(1880-1967)	月下秋叢図	1960頃	紙本墨画, 淡彩	62.0×21.7
59	大村廣陽	(1891-1983)	秋陽留鳥	1930頃	絹本着色	128.0×42.5
60	片山牧羊	(1900-1937)	野狐図	1930頃	絹本着色	146.0×50.3
61	大島祥丘	(1907-1996)	溪山帰樵図	1981	紙本着色	69.0×119.0
62	松本陽子	(1936-)	再び生命体について	2008	油彩, パステル, 木炭, カンヴァス	200.0×200.0
63	高松次郎	(1936-1998)	平面上の空間	1982	油彩, カンヴァス	218.0×182.0
64	中村琢二	(1897-1988)	瀨見の女(雪国の女)	1958	油彩, カンヴァス	116.5×91.0
65	小林徳三郎	(1884-1949)	花と少年	1931	油彩, カンヴァス	53.1×65.0
66	作者不詳		姫谷焼色絵日輪竹文皿	17世紀後半	磁器	3.2×17.5×17.5
67	北大路魯山人	(1883-1959)	金銀彩武蔵野鉢	1925-1934	陶	15.2×27.5×27.5
68	金重陶陽	(1896-1967)	一重切花入	1964	陶	20.0×13.0×11.0
69	樂吉左衛門	(1949-)	黒樂茶碗 銘夜聴	2003	陶	9.3×13.0×13.0
70	堀内正和	(1911-2001)	線 C	1954	鉄	45.0×78.0×46.0
71	土谷 武	(1926-2004)	植物空間VI	1990	鉄	64.0×57.5×41.5

## 和室展示 松本コレクション「高麗茶碗」

No.	作家名	(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行(cm)
72	作者不詳		青井戸茶碗 銘 岩波	朝鮮王朝時代	陶	6.0×13.8×14.0
73	作者不詳		斗々屋茶碗 銘 深山木	朝鮮王朝時代	陶	6.3×12.7×12.7
74	作者不詳		伊羅保茶碗	朝鮮王朝時代	陶	7.0×13.2×13.2
75	作者不詳		刷毛目茶碗	朝鮮王朝時代	陶	8.0×14.0×14.0

### 野田正明 プロフィール

1949年 広島県福山市新市町生まれ。  
 1972年 大阪芸術大学美術学科卒業。  
 1976年 「第26回モダンアート協会展」で大阪市長賞。  
 同年兵庫県立近代美術館 新鋭作家展「アート・ナウ '76」に選抜出品。  
 1977年 アメリカ・ニューヨークに活動の場を移し、アート・スチューデント・リーグで学ぶ。  
 1982年 ACWLPギャラリーにて個展開催、「国際空中アートの交響(空中彫刻)展」に招待出品。(N.Y.シーメドウ・セントラルパーク)  
 1997年 京阪電鉄宇治駅に大型ステンドグラス《飛翔》他を設置。  
 2000年 広島県福山市にステンレス彫刻《飛翔Ⅱ 時空を超えて》を設置。  
 2002年 広島県立戸手高等学校に《飛翔Ⅲ ドリームキャッチャー》を設置。  
 2003年 広島県神辺町ひらの保育所に《飛翔Ⅴ リュミナリー》を設置、  
 中国・深川美術館に《飛翔Ⅵ 天空昇》を設置。  
 2005年 ギリシャ・デルフィ(アポロン神殿のとりに)に《アポロの鏡》を設置。  
 2006年 ふくやま美術館にて「野田正明展 ニューヨークからのメッセージ」を開催。  
 2009年 アテネのギリシャ・アメリカン大学にステンレス彫刻《ラフカディオ・ハーンの開かれた精神》を設置。  
 翌年、松江市宍道湖畔へも姉妹作品を設置。  
 2010年 ギリシャ・マラトニ市にステンレス彫刻《ヘルメスの精神》を設置。  
 2011年 広島市現代美術館彫刻公園へステンレス彫刻《疾風 フラッシュバック》を設置。  
 2012年 福山駅南広場へステンレス彫刻《いまこそ未来》を設置。  
 2014年 レフカダ・カルチャー・センターに《ラフカディオ・ハーンと開かれた精神のオディッセイア》を設置。  
 2015年 ニューヨーク日系人会(ニューヨーク)に《光彩》を設置。  
 シギヤ精機製作所(福山)に《無限の可能性》を設置。  
 2016年 福山市かんなべ市民交流センター屋内にある吹き抜けの壁面にモニュメント《啓発》を設置。  
 現在 ニューヨーク・ソーホーに居住。オーデュボンアーティスト協会 ディレクター、アメリカ版画協会 委員、  
 アメリカ アーティスト同盟、委員、審査員を歴任。



野田金属工業株式会社(大阪)にて 2014年

1992から95年まで、40代半ば頃の野田は、中国新聞社の知り合いから、文化欄の寄稿依頼を受ける。およそ月1回のペースで計29回、ニューヨークでの体験談をはじめ、クリスト、チャック・クロース、ナムジュン・パイク、アレクサンダー・モンロー、ロイ・リキテンsteinなど30人近いアーティスト、文化人に直接取材し、同欄の「ニューヨーク人間模様(3回目以降「ニューヨーク便り)」」に寄稿した。野田にとって、当時活躍中のアーティストから芸術論や制作手法など、直に聴くことの出来た貴重な経験となり、その後の制作、生き方に大きな影響を与えることとなった。

1997年、野田は、後に展開する公共モニュメントの先駆けとなった、京都府宇治市の京阪電鉄宇治駅南入口にステンドグラスによるモニュメント《飛翔(去来、流転、天空昇)》を制作する。

この頃、野田は、野外に設置されるパブリックアート、とくにパーマナントとして設置されるモニュメントの社会的な重要性を感じていた。2000年に福山市新市町の福戸橋北詰めに設置された《飛翔Ⅱ 時空を超えて》は、台座をあわせると高さ6メートルのステンレス製のモニュメントである。鏡面仕上げの厚さ4ミリのステンレス鋼板を巧みに湾曲させたその姿は、「飛翔」というタイトルからも分かるように、躍動感あふれた羽ばたきを感じさせるものである。

《予期》(no.23)は、野田の選んだ西洋古典絵画の図版を複写分解し、パズルのようにパーツごとに組み合わせ合わせてコラージュした後、手彩色で仕上げた作品である。楕円の額縁越しに夢の中を覗いているような非現実感を見る者に与えている。シルクスクリーン版画と同様に、飛び出すような流体のイメージを感じさせるなど、さまざまな表現のアプローチがみられる。

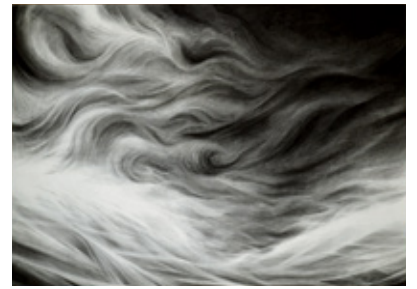
1999年、野田はニューヨークの70thアート・ギャラリーではじめて立体と平面作品による新作の個展を開催した。鏡面仕上げのステンレスや真鍮の彫刻とともに、水彩による絵画が展示された。立体と平面により、新しい境地を示す意欲的な個展であった。この個展で野田は、平面と立体が互いに影響し合う交感的な表現から「空間のコンダクター<sup>(2)</sup>」と称賛された。

その空間表現は、《可能性》(no.25)や《反芻》(no.26)にみられるように、鳥の飛翔や流体のスピードのイメージから、さらに昇華されて、ダイナミックで有機的な生命感が表されている。野田は、その形態のイメージに合わせて、ブロンズの色調や仕上げ具合などを考慮して暖色系の黄金色で鏡面に仕上げたのであった。

野田は、50歳を過ぎて、《進化Ⅲ》(no.39)にみられる、アクリルや水彩で描いた幾何的なバーチャル空間を生み出すなど、油彩にも匹敵する強靱なマチエールをもった不透明水彩の絵画作品を制作している。肉厚の紙に不透明水彩を厚く塗ったものであり、紙のエッジは描かれた形態に合わせて切り抜かれている。3次元的に飛び出していくような錯覚に陥らせる仕組みになっている。無数の幾何学立体模型が、宇宙の爆発によってあたかも飛び散っていくような瞬間を描いている。野田は、そのエネルギーに満ちた拡散の波動やカオス(混沌)を豊かな色彩で表現している。それが、見る者に新たなインスピレーションを湧かせるような不思議な魅力を放っているのである。

2005年、野田は、アポロン神殿のあった町、デルフィにステンレス製の高さ3.8メートルの《アポロの鏡》を設置した。これは、野田と30年来親交のあるギリシャ人、アートディーラー、タキス・エフスタフが、2003年に中国広東省にある深圳美術館で開催した回顧展の反響の大きさに注目して、デルフィのヨーロッパ文化センターからアジア人として初の作品制作の依頼を取り付けたことによる。また、彼は、1995年にフランスのアンティープで野田の個展を開催した際、ギリシャに野田を招き入れ、ギリシャのレフカダ島やデルフィなどを案内した。

古代ギリシャの彫刻を目の当たりにした野田は、はじめ彫像群に圧倒されたという。その後ギリシャでのプロジェクトを進めるうちに、その普遍性を造形の中に見出す。制作において野田は、時代を超えた精神性が必要と考えるようになる。また同地では、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)の生誕地を訪れた。ハーンの足跡に関心を持った野田は、自身のアートの深化と東西の文化交流に目覚めることとなる。



21. 《飛翔》1983年



23. 《予期》1998-2003年



25. 《可能性》2005年



39. 《進化Ⅲ》2000-2003年



27. 《ラフカディオ・ハーンの開かれた精神のオディッセイア》2009年



29. 《ヘルメスの精神》2010年



41. 《覚醒-V》2009年

野田が60歳を迎えた2009年、「日本ギリシャ110周年友好記念」にアテネのギリシャ・アメリカン大学キャンパスへ《ラフカディオ・ハーンの開かれた精神》の彫刻設置とあわせてハーンをテーマにした展覧会を開催した。翌年には、「小泉八雲来日120周年」を記念して、松江城天守閣で展覧会が開催され、宍道湖畔にアテネと同型の彫刻が両国で呼応するように設置された。

その5年後、2014年には、「小泉八雲没後110周年」を記念して、レフカダ・カルチャー・センターに《ラフカディオ・ハーンと開かれた精神のオディッセイア》を設置。この同名のマケット作品(no.27)は、広がりをもった、2つの翼が絡み合った造形である。2つの翼の隙間にある空間には、ハートが形作られている。これは、ハーンの求めた東洋と西洋との「共生」を象徴したものであった。「オディッセイア」とは、詩人ホメロスの作として伝承された古代ギリシアの長編叙事詩であり、ハーンの生地からその後の彼の苦難の旅の始まりを示唆したものであった。これらのモニュメント設置は、野田にとってハーンの足跡を点から線へ、線から面へと繋がりを持つことを実感させるものであった。

2010年は、マラソン発祥につながるマラソンの戦いから2500周年にあたっていた。野田は、マラソン市長より記念碑制作の依頼を受けて《ヘルメスの精神》(no.29)のマケットを制作。実作は、高さ5メートルあり、アテネマラソンのスタート地点でもある競技場の屋外に設置された。ギリシャ神話のヘルメス神をイメージした躍動感あふれる造形で、力強く走るランナーや軽やかに羽ばたく鳥にも見える。翌年には、広島市現代美術館の彫刻公園に《疾風 フラッシュバック》を設置するなど、国内外で公共モニュメントの設置が続いた。

同年には、福山市立大学に装飾合わせガラスによる《進化》、《探求》を制作した。これは、彫刻の小品を連続と複製したものを鉛筆で描き起こすなど加工し、最終的にガラスに特殊印刷して取り付けられたものである。この一連の作品は、《覚醒-V》(no.41)の素描類がその表現の原形になっているが、写真、コンピューターグラフィックの領域とも近い関係にある。

2012年には、福山駅南広場へ《いまこそ未来》を設置。鏡面仕上げのステンレス彫刻は、角度や天候、見る人の気持ちにより表情が大きく変わって見える。ある角度からは折鶴のようであり、また別の角度からは風車のようであり、福山を象徴するバラのようでもあり、未来に向けて希望に満ち溢れた作品となっている。

2016年、福山かんなべ市民交流センター屋内にある吹き抜けの壁面に、モニュメント《啓発》が設置された。ステンレスに金色と銀色を塗装した華やかなものである。野田は、「作品を見た福山の人が、世界に発信できるような何かを持ってほしい」という願いを込めて制作したものである。

野田が自作を語るなかで、「アートはコミュニケーション<sup>(3)</sup>」という言葉をよく耳にする。ニューヨークを拠点に40年近くにわたって平面、立体とあらゆるジャンルに挑み続けてきた。アメリカをはじめ、アジア、ヨーロッパと国情の異なる国々での個展やモニュメント設置など、現地との交流を通して実感したものであるに違いない。この言葉は、野田芸術を探るうえでのキーワードといえる。

多くの人が、野田作品に共通してみられる、躍動的な表現に共鳴する。そこには、「ハーンが求めた共生の時代<sup>(4)</sup>」に通底する、国や地域、文化の垣根を越えた時間、空間といった、野田の普遍的なメッセージが込められているのである。

(学芸員・主査 大前勝信)

註

- (1) 野田正明「アート、未来へ繋がるコミュニケーション」『よみタイム』2014年5月2日 よみタイム社
- (2) 守屋正彦「(アポロの鏡)、空間の指揮者」『野田正明展 ニューヨークからのメッセージ』2016年1月13日 ふくやま美術館
- (3) 野田正明「アートはコミュニケーション」『アートはコミュニケーション』2016年6月15日 野田正明展推進委員会
- (4) 小泉凡「開かれた精神を具現化」『ラフカディオ・ハーンの開かれた精神のオディッセイア』2014年7月4日 ラフカディオ・ハーン歴史センター

## 【編集後記】

野田正明先生が当館で「野田正明展 - ニューヨークからのメッセージ」を開催したのは2006年でした。それから10年、日本とニューヨークの間を何度も往復しながら、福山、広島、松江、ニューヨーク、ギリシャのアテネ、マラソンにモニュメントを設置するとともに同地で展覧会も開催するなどの国際的な活動を続けています。今回の特集展示は、今年ご寄贈をいただいた149点の内の17点を含めた42点により新しい「野田正明の世界」をお見せしようというものです。

(副館長 谷藤史彦)